

大学生の認知した親からの期待と養育態度が アイデンティティに及ぼす影響

尾花 真梨子*・倉田 由美子**・神崎 亮佑***

要 約

本研究では、大学生の親からの期待と養育態度がアイデンティティの形成にどのような影響を及ぼしているのかを検討するために、大学生212名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、分析1では、親からの期待における「教育・就職期待」と親の養育態度における「受容」が、全般的なアイデンティティと関連することが示唆された。その上で、分析2において、「教育・就職期待」と「受容」がアイデンティティにどのような影響を及ぼすのかを検討した。その結果、「受容」が全般的なアイデンティティに影響を及ぼしていることが明らかとなった。また、下位尺度ごとの検討により、親が自身に対して受容的であると捉えていることが、アイデンティティの「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」のそれぞれに影響を及ぼしていた。また、教育や就職に関する親の期待は、アイデンティティの中でも、自分がどこに向かって行こうとしているのかよくわかっている感覚に影響することが示唆された。しかし、いずれの分析も有意ではあったが、その影響の程度は低いことが示された。その上で、今後は、父親・母親それぞれの期待や養育態度を区別して測定する必要性や親からの期待や養育態度以外の多様な要因を含めた検討を行う必要性が確認された。

キーワード：親からの期待、養育態度、アイデンティティ

問題と目的

Eriksonによって概念化された「アイデンティティ(identity)」の問題は、青年期の発達課題として広く知られている。アイデンティティとは、幼児期以来形成されてきたさまざまな同一化や自己像が、青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する、斉一性・連続性を持った自我の確立の状態である(Erikson, 1963)。つまり、自分は自分であるという認識が過去・現在・未来という時間的連続性をもって維持されていく状態

であるといえる。とりわけ青年期は、自分自身を模索する時期であり、「私は何者か」あるいは「私には何ができるか」といった問題に向き合っていく時期とされる。そして、青年期のアイデンティティは、統合寄りの状態になると不安や心身の症状と負の相関、混乱寄りの状態になると正の相関になると予測される(平田, 2018)。つまり、アイデンティティの状態は、個人の心身の健康にも関連する要因であると推察される。このようなアイデンティティは、自分にとって重要な他者や集団からの承認の中による、他者との関係性から成り立つものであり、重要な他者である両親や友人、恋人との関係性は必要不可欠とされる(杉村, 1998)。また、アイデンティティ形成の過程は、他者の意見・期待も考慮し、自己と他者の視点の食い違いを解決しながら人生の重要な選択を

2021年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科 講師 臨床心理学

** 江戸川大学 心理相談センター 助教 臨床心理学

*** 江戸川大学 人間心理学科 2019年度卒業生

決定していくことであるとも定義されている(杉村, 2001)。このことから、アイデンティティの形成には他者との関係性が重要であり、自分と他者との違いを相互調整し、解決していくことが求められるといえよう。

中でも、重要な他者として、親との関係に着目した研究が散見される。たとえば、谷(1997)は、青年期の自我同一性と対人恐怖の心性について検討している。そして、アイデンティティの危機において「個」としての自己をどのように位置づけるかという問題として、その位置づけの不安定さが「個」-「関係」の葛藤を引き起こし、対人恐怖の心性に関連していることを明らかにしている。また、宗田・大澄・岡本(2011)は、青年期のアイデンティティ(「個」と「関係性」)と家族機能(「凝集性」と「適応性」)、家族イメージとの関連を検討している。その結果、「個としてのアイデンティティ」と家族の役割を表す「適応性」、「関係性に基づくアイデンティティ」と家族の情緒的な結びつきを表す「凝集性」、内在化した他者像を示す「個体内関係性」とアイデンティティとの間に関連がみられることをそれぞれ示唆している。さらに、白岡・岡本(2005)は、大学1~3年生を対象に、家族機能の特徴とアイデンティティの発達との関連を調査している。そして、家族における結びつきや役割の柔軟性が高い場合、大学1年生においては「個」と「関係性」のアイデンティティ得点が高くなることを明らかにしている。このように、近年では家族や親子関係など、他者との関連性に着目したアイデンティティ研究が盛んに行われている。これは言い換えれば、家族や親子関係が青年のアイデンティティ形成に大きく関与する要因になり得ることを示唆していると考えられる。実際、高橋(2001)は、親子関係がアイデンティティの発達に重要な役割を果たしていることを明らかにしており、青年期の親子関係は、アイデンティティの発達においても重要な側面であると考えられる。

その中で、本研究では、「親からの期待」に着目することとする。実際、我々は日々の生活の中で学業やキャリア選択に関して、親から何らかの

期待をされていることも多い。さらには、「正直な子であって欲しい」や「思いやりのある子に育てて欲しい」など、子どものパーソナリティに関する期待も多数存在する。このような期待は、親が子どもを育てる上で自然に発生するものと考えられる。しかし、青年期は、これまで一体化してきた家族から自分を切り離し、家庭外に関心を移し、自律的な判断や親から独立した行動が可能になる時期である(河村, 2003)。すなわち、児童期以前は親の期待をそのまま受け取っていたものの、青年期では親からの期待をそのまま受け入れるのではなく、それと自分の価値観とを照合する過程を経て自分なりの生き方を模索する発達段階に突入すると推察される。また、長峰(2003)は、職業選択・決定の過程では、自らの希望や価値観だけでなく、親が抱いている(職業に関する)価値観、親の自分に対する期待、あるいは親から受けてきた自分に対する評価なども影響を与えると述べている。すなわち、大学生が自身のその後のキャリアを考える際にも、親の期待が何らかの影響を及ぼしていると考えられる。このことから、青年が親の期待をどのように捉えているかという視点は、キャリア選択も含むアイデンティティの形成という文脈において、重要な視点であると推察される。また、渡部・新井(2008)は、親の期待が子どもの自己肯定感を育て、子どもにとって支えとなる一方、親の願望と自分の願望との間に不一致が生じた場合や親の期待が自分の能力に対して過剰である場合には負担となることを示唆している。これは、子どもにとって親の期待が時に励ましやモチベーションの維持に役立つ一方、時に重圧や負担になり得るという両面性を持ち合わせていると考えられる。同時に、期待に対して反発や抵抗をすることで、自我が確立していくとも述べており(渡部・新井, 2008)、親からの期待と折り合いをつけることが、子どもの発達上重要であると推察される。また、河村(2003)は、親からの期待が子どものアイデンティティ形成に少なからず影響を与えていることを示唆している。加えて、池田(2009)は、親の期待に対する反応様式とアイデンティティの形成との関係性

を検討しており、親の期待に対して負担感や反発、表面的な迎合を示すことを通して、青年は親の期待から距離を取り、自らのアイデンティティを形成していく可能性を指摘している。しかし、親の期待の具体的内容を考慮しておらず、どのような期待が子どものアイデンティティ形成と関連するのかは明らかにされていない。加えて、親からの期待による自尊感情やアイデンティティの影響を検討した研究は散見されるが、いずれの研究においても、親からの期待が青年のアイデンティティに対して明確な影響力があるという結果は得られていない現状にある。そして、仲野・桜本(2006)も、親が子にける期待と、それを子がどのように受け止めていくかは重要な問題を内包していることを指摘していることから、この点に着目した検討は重要であると考えられる。

さらに、子どもの社会的行動に影響を与える要因の一つとして、母親の養育態度が挙げられている(戸田, 2006)。親の養育態度に関する古典的理論として、Baumrind (1971) がある。そこでは、親の養育、親と子どもとのコミュニケーションにおける応答性と成熟への要求、子どもの行動を管理する(しつける)要求性の高低に基づいて、養育スタイルを「権威的養育スタイル(Authoritative parenting style)」「権威主義(独裁)的養育スタイル(Authoritarian parenting style)」「許容的養育スタイル(Permissive parenting style)」の3つに分類している。また、Maccoby & Martin (1983) は、「権威的養育スタイル」「権威主義(独裁)的養育スタイル」「許容的養育スタイル」、そして「放任的養育スタイル(Uninvolved parenting style)」の4養育スタイルを提示している。他方、アイデンティティの統合に近似する概念として、自ら自己成長を成し遂げようとする認知・行動を示す「自己成長主導性(Robitschek, 1998; Robitschek et al., 2012)」や、自尊感情への影響では、権威的養育スタイルの家庭で育った青年がより肯定的であることが示唆されている(Hirata & Kamakura, 2017)。また、菅原・伊藤(2006)も、児童期に母親にどのような態度で接せられたと認知しているかが、青年期

の自尊感情に関係していることを明らかにしている。そして、親の養育態度を肯定的に認知しているほど、内的作業モデルの“不安”と“回避”が低く、“不安”と“回避”が低いことが社会的適応を良好にすることが確認されている(島, 2014)。さらに、女子青年の職業選択と父母の養育態度の関連については、父母が実際に示す養育態度が娘の性役割選択、中でも職業か家庭かという役割指向性の違いを大きく左右することを指摘している(伊藤, 1995)。これらのことから、青年が親の養育態度をどのように認知しているかは、彼らの心理社会的適応や自己成長に影響し得る一つの要因であると考えられる。しかし、親の養育態度への捉え方とアイデンティティとの関連を検討した研究はあまり見当たらない。

以上を踏まえ、本研究では、親の期待と親の養育態度の2要因が青年期のアイデンティティに影響していると仮定し、親の期待が高く、親の養育態度が受容的であり、統制的ではないほどアイデンティティの感覚が高くなるとの仮説を設定した。そして、大学生が認知する親からの期待と養育態度が、アイデンティティにどのような影響を及ぼすのかについて検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

江戸川大学の学生のうち、心理学系の科目を履修している191名(男性102名、女性89名、平均年齢19.07歳、SD=1.09歳)を分析の対象とした。

調査内容

本研究で使用した質問紙の構成は、以下の通りであった。

1. フェイスシート

調査対象者の学年、年齢、性別を聴取した。

2. 多次元自我同一性尺度

青年期における同一性の感覚を測定する尺度として、谷(2001)の「多次元自我同一性尺度(以

下、MEISとする)」を用いた。本尺度は、「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」の4因子20項目から構成されている。「自己斉一性・連続性」とは、同一性の感覚における自己の不変性および時間的連続性を意味する項目群からなる。また、「対他的同一性」は、他者から見られている自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚を表す項目からなり、「対自的同一性」は、自分自身が目指すべきものや望んでいるものが明確に意識されている感覚を表す項目で構成されている。そして、「心理社会的同一性」は、自分と社会との適応的な結びつきを表す項目からなる。回答は「全く当てはまらない(1)」から「非常に当てはまる(7)」の7件法で求めた。なお、本尺度における得点は20点～140点で示され、得点が高いほど自我同一性が確立されていると評価される。

3. 親の期待尺度

大学生が、過去に親からどのような期待をかけられたと感じているかについて尋ねるために、春日・宇都宮(2011)が作成した「親の期待尺度」を採用した。本尺度は、「人間性期待」と「教育・就職期待」の2因子29項目からなる。「人間性期待」は、子どもの性格や人格に対する期待であり、「教育・就職期待」は学校や仕事に対する期待となっている。回答は「当てはまらない(1)」から「当てはまる(5)」の5件法で求めた。なお、本尺度における得点は29～145点となり、得点が高いほど各側面における親からの期待を感じていることを意味する。

4. 養育態度尺度

大学生が認知する親の養育態度について尋ねるために、小高(2017)の「母の養育態度に関する質問項目(以下、養育態度とする)」を用いた。本尺度は、「母はいつも私のことを見守ってくれる」「母は言うことをきかないと叱る」など、母親の養育態度を分析するための質問項目で構成される2因子16項目の尺度である。本研究では、大学生が認知する両親の養育態度を調査するため、質問項目の“母親”の部分で“両親”に置き換えて使用した。そして、原版と同様に、親の受

容的な養育態度(理解、味方、傾聴等)を示す「受容」と親の統制的な養育態度(口出し、把握、押しつけ等)を示す「統制」の2因子を想定した。回答は「当てはまらない(1)」から「当てはまる(4)」の4件法で求めた。なお、本尺度における得点は16～64点となり、得点が高いほど親の養育態度の各側面における評価を意味している。

手続き

本研究では、調査協力の得られた授業において授業終了後に質問紙を配布し、集団一斉方式にて行われた。調査の依頼と内容に関する説明は第三筆者が行い、質問紙の表紙に記載されている倫理的配慮事項を漏れなく説明した。そして、本研究の趣旨を理解し、それに同意した者のみが回答するように依頼した。回答時間は15分程度であり、回答終了後にただちに回収された。

調査時期

2019年7月に実施された。

倫理的配慮

調査対象者には、調査実施前に、本研究の主旨、本研究への協力は任意であり、無記名式で行われること、当該科目の成績とは無関係であること、データは統計的に処理されるため、特定の個人の回答が公表されることはないこと、途中で回答を中止しても不利益を被ることはないこと等を口頭および紙面にて十分に説明し、質問紙への回答をもって、これらに同意したものとみなした。

なお、本研究は、江戸川大学社会学部人間心理学研究倫理審査小委員会の承認を得て実施された(承認番号:A2019-025)。

結果

記述統計量および信頼性係数の算出

本研究における記述統計量は、Table1の通りである。

Table1 記述統計量および信頼性係数

	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度	α 係数
MEIS 合計	26.00	126.00	74.48	20.40	.06	-.23	.91
自己斉一性・連続性	5.00	35.00	20.50	7.56	.01	-.63	.89
対自的同一性	5.00	35.00	17.72	6.86	.29	-.23	.83
対他的同一性	5.00	35.00	17.48	6.23	.14	-.24	.84
心理社会的同一性	8.00	29.00	18.82	4.27	.08	-.05	.37
親の期待合計	29.00	143.00	107.65	17.61	-.88	2.86	.92
人間性認知	18.00	90.00	70.71	11.65	-1.16	3.21	.92
教育・就職期待	11.00	55.00	36.77	9.18	-.19	-.31	.90
養育認知合計	18.00	66.00	44.47	7.40	-.08	1.33	.66
受容	8.00	46.00	24.99	6.72	-.84	.52	.83
統制	8.00	32.00	19.49	5.33	.18	-.32	.80

分析1：アイデンティティと親の期待、 養育認知の関連性

本研究で用いた尺度間の関連を検討するために、相関分析を行った (Table2)。

その結果、MEIS 合計得点は、「親の期待尺度合計得点」と「養育認知尺度合計得点」との間に有意な相関は認められなかった。また、「MEIS 合計得点」は親の期待尺度の下位尺度である「人間性期待」とは有意な相関は示されなかった。また、「養育認知尺度」の下位尺度である「受容」($r = .26, p < .001$) および「統制」($r = -.18, p < .05$) と「MEIS 合計得点」はそれぞれ低い相関関係にあることが認められた。

MEIS の下位尺度と「親の期待尺度」および「養育態度尺度」の関連性をそれぞれ概観すると、「自己斉一性・連続性」は「受容」($r = .17, p < .05$) と「統制」($r = -.16, p < .05$) と関連がみられた。「対自的同一性」は「教育・就職期待」($r = -.23, p < .01$) および「受容」($r = .21, p < .01$) との間に有意な弱い相関が示され、「対他的同一性」は「受容」($r = .24, p < .01$) と「統制」($r = -.17, p < .05$)、「心理社会的同一性」は、「受容」($r = .24, p < .01$) との間に有意ないずれも弱い相関が示された。

以上より、MEIS の合計得点各下位尺度と親の養育態度である「受容」はいずれも非常に弱い関連性が示唆された。

分析2：親からの期待と養育態度が アイデンティティに与える影響

親からの期待と養育態度に対する認知が、アイデンティティにどのような影響を及ぼすのかを検討するために、分析1より「MEIS 合計得点」とその各下位尺度得点との間に関連が想定された親の期待尺度の「教育・就職期待」と養育認知尺度の「受容」を説明変数とし、MEIS 合計点と MEIS 下位尺度をそれぞれ目的変数とする、強制投入法による重回帰分析を行った。

その結果、「MEIS 合計得点」への影響性について、「教育・就職」からは有意な影響は示されなかったが、「受容」からは有意な影響が示された ($\beta = .25, p < .001$)。MEIS 下位尺度である「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会敵同一性」をそれぞれ目的変数とした場合では影響の程度は低い、いずれか、もしくは両方の有意な影響が示された。また、「自己斉一性・連続性」では「教育・就職期待」の有意な影響は示されなかったが、「受容」は5%水準の有意な影響が示された ($\beta = .17, p < .05$)。一方、「対自的同一性」では、「教育・就職期待」において1%水準で有意な影響が示され ($\beta = -.21, p < .01$)、「受容」は1%水準で有意な結果が示された ($\beta = .19, p < .01$)。また、「対他的同一性」では、「教育・就職期待」で有意な影響は示されなかったが、「受容」からは1%水準の

Table2 相関分析の結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1.MEIS 合計	—	.87***	.76***	.84***	.79***	-.02	.06	-.14*	.10	.27***	-.16*
2.自己斉一性・連続性		—	.49***	.67***	.58***	-.03	.06	-.04	.03	.18*	-.14*
3.対自的同一性			—	.43***	.51***	-.06	.05	-.21**	.11	.21**	-.10
4.対他的同一性				—	.65***	-.03	.02	-.10	.09	.24**	-.15*
5.心理社会的同一性					—	-.03	.03	-.11	.11	.23**	-.11
6.親の期待合計						—	.88***	.80***	.37***	.21**	.27***
7.人間性期待							—	.43***	.34***	.37***	.04
8.教育・就職期待								—	.27***	-.08	.45***
9.養育認知合計									—	.68***	.54***
10.受容										—	-.25***
11.統制											—

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table3 各重回帰分析の結果

目的変数	(n = 192)			説明変数			
	R	R ²	p 値	教育・就職期待		受容	
				β	p 値	β	p 値
MEIS 合計得点	.29	.09	***	-.13	n.s.	.25	***
自己斉一性・連続性	.17	.03	*	-.02	n.s.	.17	*
対自的同一性	.29	.09	***	-.21	**	.19	**
対他的同一性	.25	.06	**	-.08	n.s.	.23	**
心理社会的同一性	.25	.06	**	-.09	n.s.	.22	**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

有意な影響が示された ($\beta = -.23, p < .01$)。「心理社会的同一性」でも、「教育・就職期待」からは有意な影響は示されなかったが、「受容」からは1%水準の有意な結果が示された ($\beta = .23, p < .01$)。しかし、いずれもモデル全体を説明する重決定係数 (R^2) の値は、有意ではあったが低い値を示した。なお、「親の期待尺度合計得点」と「養育認知尺度合計得点」を説明変数とし、「MEIS 尺度合計得点」を目的変数とした重回帰分析も行ったが、有意な影響は示されなかった。上記の各重回帰分析の結果は、Table3 に示した。また、MEIS 尺度に対して2要因とも有意な結果が示された重回帰分析の結果を Fig.1 に示した。

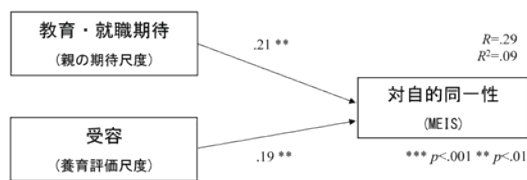


Fig.1 自我同一性 (MEIS) への影響

考察

本研究では、親からの期待と養育態度の認知が、アイデンティティの感覚とどのような関連性があるのかを検討した。そして、分析1において、各変数間の関連性を相関分析によって把握した上で、親からの期待の「教育・就職期待」と養

育態度の「受容」が、アイデンティティにどのような影響を及ぼすのかを検討するために、重回帰分析を行った（分析2）。

分析1の結果、全般的なアイデンティティの感覚は、「良い成績をとって欲しい」や「良い企業に就職して欲しい」といった教育・就職面での期待と負の相関関係にあることが明らかになった。これは、親が子どもの教育や就職に対して強い期待を持つことは、アイデンティティの形成に必ずしもつながらない可能性を示したものと考えられる。ここには、親の期待と子ども自身が望んでいることとの不一致が生じると考えられ、そのことで子どもに何らかの混乱や葛藤が引き起こされると推察される。その結果、青年の自己意識の確立の妨げにつながってしまうと考えられる。また、親の子どもへの優しさや思いやりはアイデンティティを全般的に高め、逆に子どもへの統制的な態度・行動は、アイデンティティを低める可能性が示唆された。親の受容的な養育態度が子どもの心理社会的適応と関連することは、これまでも多くの研究で示されてきたところである。また、白濱（2017）は、青年が親の態度を共感的と捉える場合、青年のアイデンティティ発達の度合いが高くなることを示唆している。受容的態度と共感的態度は、ともに子どもに対するポジティブな養育態度であるという点で類似すると考えられることから、本研究の結果は、先行研究の知見を追認するものであったと推察される。また、MEISの各下位尺度は「受容」と全般的に関連することが示された。すなわち、青年が両親から受け入れられていると認識することで、アイデンティティの各側面も強化されると考えられる。

分析2の結果から、教育や就職に対する親の期待および受容的な親の養育態度が、大学生のアイデンティティに部分的ではあるものの、影響力を有していることが明らかになった。小高（2017）は、母親の受容的な養育態度の認知が、青年の協調性を形成する可能性があり、親の温かな養育態度は子どもに安心感や信頼感を与え、それが他者への信頼感や思いやりにつながり、愛他的なパーソナリティを形成することを示唆している。この

ことから、本研究においても、親の受容的な態度は青年のアイデンティティに対してポジティブな影響力を有することが実証されたと考えられる。他方、春日・宇都宮（2011）は、「教育・就職期待」が期待への評価のうちの「重荷」に正の影響を与え、親の期待に応えるための努力が必要であることが結果に影響したことを報告している。本研究でも、「教育・就職期待」は負の影響力を有していたことから、青年にとって教育や就職の面で期待されることは心理的負担感につながり、それが結果としてアイデンティティにも影響を及ぼしていたと考えられる。その他にも、一貫性のないしつけ、厳しい身体的なしつけ、親子のあたたかい交流や教育的なかわりの不足が、社会的情報処理に問題を生じさせ、反社会的行動のリスクを高めることが複数の研究を通じて報告されている（吉澤・吉田・原田・浅野・玉井・吉田、2017）。また、スチューデントアパシーの高い青年の家庭では、主に情緒的なかわりを欠いた統制的な養育態度とともに、親の学歴偏重の過剰期待という特徴が挙げられている（染田、2000）。さらに、富澤（2005）は、親の期待を強く感じるほど、大学生が受ける負担感は増大すると指摘している。つまり、非受容的な親のかかわりや過剰な期待は、子どもの認知面や行動面にネガティブな影響を及ぼす可能性があるといえよう。そして、三好（2011）は、大人が教育や躾と称して子どもたちを思い通りに育てようとした場合、子どもたちは活力の生成を阻害され、どんなに才能、能力に恵まれても自分の才能・能力が何に適しているのかを見出すことができなくなると述べている。このような知見と本研究を照らし合わせれば、とりわけ親が子どもの教育や就職に対して過剰な関心を寄せることは、子どものアイデンティティの形成という文脈においては、返ってネガティブな影響を及ぼしかねないということを意味していると考えられる。しかし、モデルの説明率はいずれも低く、本研究の結果を一般化するには十分とは言えない。そのため、青年のアイデンティティの形成を説明可能な要因によるモデルの再検討が必要であると考えられる。

今後の課題

本研究では、親の期待と養育態度に着目して大学生のアイデンティティとの関連を検討した。その結果、親の期待のうちの「教育・就職期待」と養育態度のうちの「受容」が、アイデンティティの規定要因となり得ることが示唆された。このことから、子どもに対する親の受容的な態度は、アイデンティティの形成という観点においても重要であることを再認識する結果となった。同時に、子どもの教育や就職への親の過剰な期待は、子どものアイデンティティ形成に負の影響を及ぼす可能性が示唆された。本研究で得られたこのような知見は、青年のアイデンティティ形成を考える上で、一定の意義があったと考えられる。

その一方で、本研究ではいくつかの課題も散見される。まず、本研究で用いた親の期待尺度について、小高（2017）では「母親」としていた部分を「両親」に変更して調査を行った。この点について、調査対象者の中には、両方の親の複合的イメージで回答した可能性があり、そのことが結果に何らかの影響を及ぼした可能性もある。池田（2009）でも、父親の期待と母親の期待に対する反応様式が異なる可能性が予想されている。また、権威的養育スタイルの父親、母親に育てられたと回想する大学生は、放任的養育スタイルの父親に育てられたと回想する大学生、権威主義（独裁）的養育スタイル、放任的養育スタイルの母親に育てられたと回想する大学生よりも、アイデンティティの統合が有意に高いことも報告されている（平田，2018）。同時に、権威主義（独裁）的養育スタイル、放任的養育スタイルの父親、母親に育てられたと回想する大学生よりもアイデンティティの混乱が有意に低いことが明らかになっている。このように、両親それぞれの養育スタイルによっても、子どものアイデンティティの感覚に差異が生じることから、今後はそれぞれの親からの期待に分けて検討することも有用であると考えられる。

加えて、親の行う養育やしつけと、それらの行

動に対する子どもの認知を区別する必要があることが指摘されている（吉田他，2017）。本研究では、大学生が認知した親からの期待と養育態度を聴取したが、それが実際のそれを反映したものであるかは判断できない。そのため、その点についても十分に留意した検討が求められると考えられる。

また、本研究では、重回帰分析における重決定係数および標準偏回帰係数はそれほど大きな値とはならず、親の期待と養育態度が青年のアイデンティティに対して強い影響力を持つ要因になるとは言い難かった。つまり、アイデンティティを規定する要因には、その他さまざまなものが存在すると推察される。今後は、本研究で取り上げた親の期待や養育態度を子どもがどのように捉えているかという視点に加え、その他の要因も含めた詳細な検討が望まれる。

引用文献

- Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monographs*, 4, 1-103.
- Erikson, E.H. (1963). *Childhood and Society* (2nd ed). New York: Norton.
- 平田 裕美 (2018). 父親・母親の養育スタイルに関する大学生の回想とアイデンティティ形成. *心理学研究*, 89, 221-228.
- Hirata, H., & Kamakura, T. (2017). The effects of parenting styles on each personal growth initiative and self-esteem among Japanese university students. *International Journal of Adolescence and Youth*. Advance online publication. doi:10.1080/02673843.2017.1371614
- 池田 幸泰 (2009). 大学生における親からの期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係. *青年心理学研究*, 21, 1-16.
- 稲垣 実果 (2007). 自己愛的甘え尺度の作成に関する研究. *パーソナリティ研究*, 16, 13-24.
- 春日 秀朗・宇都宮 博 (2011). 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響——子どもの期待に対する反応様式に注目して——. *立命館人間科学研究*, 22, 45-55.
- 河村 照美 (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連. *九州大学心理学研究*, 4, 101-110.
- 小高 恵 (2017). 大学生の母子関係とパーソナリティとの関連性についての一研究. *大成学院大学紀要*, 19, 53-62.
- Maccoby, E. E., & Martin, J. A. (1983). Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In P. H. Mussen (Ed.), *Handbook of child Psychology: Vol.4. Socialization, personality, and social development* (4th ed., pp. 1-101). New York: Wiley.

- 三好 昭子 (2011). 有能感の生成と、その後のアイデンティティに基づいた生産性について伝記資料による比較分析——谷崎潤一郎と芥川龍之介の伝記資料を用いて—— 発達心理学研究, 22, 286-297.
- 長峰 伸治 (2003). 親との葛藤から見たフリーター——複数の事例による検討—— 現代のエスプリ, 427, 105-115.
- 仲野 好重・桜本 和也 (2006). 親子関係の期待と青年期のアイデンティティの相互性について 大手前大学社会学部論集, 6, 111-126.
- Robitschek, C. (1998). Personal growth initiative: The construct and its measure. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, 30, 183-198.
- Robitschek, C., Ashton, M. W., Spering, C. C., Geiger, N., Byers, D., Schotts, G. C., & Thoen, M. A. (2012). Development and psychometric evaluation of the Personal Growth Initiative Scale-II. *Journal of Counseling Psychology*, 59, 274-287.
- 島 義弘 (2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか——内的作業モデルの媒介効果—— 発達心理学研究, 25, 260-267.
- 白濱 あかね (2017). 青年期の意思決定場面における親の養育態度の認知と青年の自己表現の関連 九州大学大学院人間環境学府人間共生システム専攻修士論文 (未公開)
- 杉村 和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探究——2年間の変化とその要因—— 発達心理学研究, 12, 87-98.
- 高橋 由利子 (2001). 青年の自我同一性の発達と親子関係について 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 220.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 戸田 須恵子 (2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について 釧路論集: 北海道教育大学釧路校研究紀要, 38, 59-69.
- 富澤 麻美 (2005). 青年における親の期待とその負担感に関する研究——大学生・専門学校生を対象に—— 人間科学研究, 18, 35.
- 山本 彩留子・岡本 祐子 (2009). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人態度の関連性 広島大学心理学研究, 8, 107-120.
- 篠田 さやか (2000). 中学生の意欲と、親の養育態度および期待との関連 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 36.
- 吉澤 寛之・吉田 琢哉・原田 知佳・浅野 良輔・玉井 颯一・吉田 俊和 (2017). 養育・しつけが反社会的行動に及ぼす弁別的影響——適応性を考慮した社会的情報処理による媒介過程—— 教育心理学研究, 65, 281-294.

謝辞

本研究は、第三著者が2019年度江戸川大学社会学部人間心理学科に提出した卒業論文について、本人の同意を得た上で第一著者ならびに第二著者で再分析および加筆・修正したものです。

本研究に協力してくださった江戸川大学の学生の皆様、上記卒業論文に貴重なご意見を賜りました江戸川大学社会学部人間心理学科の野田満教授に改めて感謝を申し上げます。

利益相反開示

本研究に関して、開示すべき利益相反はない。

The effects of parental expectations and nurturing attitudes on university students' identities

Mariko Obana, Yumiko Kurata, Ryosuke Kanzaki

Abstract

In this study, a questionnaire survey was administered to 212 university students to examine the effect of parental expectations and nurturing attitudes on the formation of students' identities. In Analysis 1, it was suggested that "educational and employment expectations" in parental expectations and "acceptance" in parental nurturing attitudes were related to general identity. In Analysis 2, we examined the effects of "educational and employment expectations" and "acceptance" on identity. The results indicated that "acceptance" influenced the overall identity of the students. The results of the subscales showed that parents' acceptance of their own identity had an effect on "self-sameness and continuity," "interpersonal identity," and "psychosocial identity." Moreover, parental expectations regarding education and employment affected the sense of knowing where one was headed in terms of identity. However, although both analyses were significant, the degree of influence was low. The findings suggest that it is necessary to measure the expectations and nurturing attitudes of fathers and mothers separately and to include various factors other than parental expectations and nurturing attitudes.

Key words: parental expectation, nurturing attitudes, identity